岩手県
釜石市
栗林小学校

西村　岳志（企画部）

当時の状況

私は６月 30 日から７月８日の９日間、岩手県釜石市内の避難所の一つ、栗林地区にある栗林小学校へと派遣されました。小学校の体育館が避難所として利用されており、震災から３ヶ月以上が経過した派遣当時は、震災直後 200 人以上いた避難者の方々も 40 人程に減っておりました。残った方々も仮設住宅の完成待ちであったり他県の家族のもとへ引っ越す予定であったりと、避難所についてはその役目を終え、閉鎖に向けて収束していく方向で動いている、という印象を受けました。

業務内容

私の役割は避難所全体の管理運営、救援物資の搬入、在庫管理、食事の際の食材管理などでした。これらの作業を避難所に泊り込み、釜石市の担当職員と連絡を取り合い、自衛隊の方々と協力しながら行います。

物資については乾パン、ビスケットなどの保存食料についてはかなりの量が備蓄されていました。しかし、保管場所、調理場所が無い状態では生鮮食料品の保存ができず、どうしても食事が味気ないものになりがちでした。３ヶ月以上もきちんとした食事ができない環境は心身にかなりの負担となっているようでした。

避難所の運用について

震災発生直後は携帯などの通信機器も使用できず、車両も全て流されてしまっていて他の避難所とも連絡がつかない状態でした。そのため試行錯誤で避難所を運用していったとのことでした。そんな中、派遣職員が一人一人、少しでもより良い環境を整えるため、手作りでマニュアルを作成し、引継いだ職員がさらに手を加え完成度を高めていきました。空調のない体育館という環境と、暑さが本格化する時期だったため、自分たちはこれからの暑さ対策をメインに盛り込んで改良を加え、次に派遣されてくる担当者に引継ぎました。

また、職員派遣の人的支援が始まるまでは釜石市職員が泊り込みで避難所の運営を行なっており、その間は市役所としての業務が完全に停滞していたとのことでした。さらに24時間体制の勤務が休み無く続いていたため、派遣職員のおかげでようやく家に帰ることが出来るようになったという話が印象的でした。

最後に

避難所の運営に関しては職員だけではなく避難された方々も率先して協力していただき、こちらが教えられることが多くありました。しかし、普段は元気にしている方でも、会話の中に家族が亡くした悲しみを感じることもありました。そんな状況の中でも派遣されてきたこちらの身を案じて気にかけてくれたり、声をかけてもらったりしたことが、慣れない環境の中で非常に大きな支えになったことが強く印象に残っています。そういうところに、人間の強さ、優しさという希望を感じることができました。今後も復興に向けての支援を継続していくとともに、今回経験したことを稲城市に持ち帰り今後の防災に役立てていくことが重要であると思いました。